

紀

要

第 18 号

2005. 3

滋賀県文化財保護協会
法人

高野丸山窯跡と近江のハケ目瓦

— 近江の古代寺院研究の基礎資料 7 —

北村 圭弘

1. はじめに

(1) これまでの経緯

平成3年(1991)8月、「近江の古代寺院研究の基礎資料1」と題した最初の資料紹介をおこなった。『滋賀文化財だより』161でのことである。これはその前々年に刊行された『近江の古代寺院』(近江寺院1989)の補遺を意図し、同紙上においてシリーズ化を果たそうとの試みであった。しかしながらこの企画も平成7年(1995)8月の6回目を最後として、ついぞ途絶えて久しくなってしまった(表1)。このことはひとえに私の怠慢に他ならないが、この間、滋賀県安土城郭調査研究所・滋賀県立安土城考古博物館に勤務し、まったく新しい研究分野に取り組まなければならなかったことも多少の関係がある。

(2) 下八木遺跡の補足

ただしこうしたなかで、それまでほとんど関心をもたなかった書籍等にも目を通すようになり、『新説浅井三代記』(中沢1955/P156)においては思いもかけず、5回目に紹介した下八木遺跡採集の軒丸瓦の出土事情についての記事を見つけることとなった。すなわち同書は、東浅井郡びわ村下八木の秋野九右衛門氏を浅井家臣大橋安芸守の末孫と紹介し、その屋敷跡について説明するなかで「最近奈良朝時代の古瓦とドブ貝の化石が井戸浚えの節に出

た」と付記している。一方、下八木遺跡の軒丸瓦は下八木の秋野九右衛門氏によって昭和31年(1956)に滋賀大学経済学部附属資料館に寄贈されたことが知られている。九右衛門氏と九右衛門氏とはおそらく同一人物で、時期的にみてもそれぞれ『新説浅井三代記』刊行の昭和30年以前頃と昭和36年の出来事であるから、九右衛門氏が井戸浚えによって得た「奈良朝時代の古瓦」こそ、九右衛門氏が滋賀大学に寄贈した軒丸瓦そのものである蓋然性はきわめて高いと考えられる。伝大橋安芸守屋敷跡は下八木集落中央部の北側にあり、この付近には真北に近い地割が認められる。今回そこから屋瓦の出土することが判明したわけであるから(図1上)、ここに古代寺院等の瓦葺建物が存在した可能性を想定してもよいだろう。

(3) 檜崎東遺跡の補足

次に4回目に紹介した檜崎東遺跡の軒丸瓦等についても意外なことから採集者が判明し、その遺跡の位置が明確になった。すなわち平成16年(2004)1月25日に滋賀県立安土城考古博物館において「古代瓦の見方について」と題する講座を担当した際、ある女性から檜崎東遺跡についての質問があった。このとき「彼女が瓦採集者本人かもしれない」と直感し、その旨をたずねてみたところ、まさにそうで

表1 「近江の古代寺院研究の基礎資料1～6」『滋賀文化財だより』(財滋賀県文化財保護協会)

回	遺跡名称	所在地	資料名称	No.(号)	発行年月	合本	文献
1	松尾遺跡	伊香郡高月町松尾	軒丸瓦	No.161	1991. 8	4	北村1991
	立石遺跡	東浅井郡湖北町郡上	平瓦				
2	高宮廃寺	彦根市高宮町	軒平瓦	No.172	1992. 6	4	北村1992a
3	不動谷瓦窯跡	坂田郡米原町番場	軒平瓦・平瓦	No.173	1992. 7	4	北村1992b
4	檜崎東遺跡	犬上郡多賀町檜崎	軒丸瓦・平瓦・埴	No.193	1994. 3	4	北村1994a
5	下八木遺跡	東浅井郡びわ町下八木	軒丸瓦・平瓦	No.199	1994. 9	4	北村1994b
6	八島瓦窯跡	東浅井郡浅井町木尾	軒丸瓦・平瓦・丸瓦	No.215	1995. 8	5	北村1995
(参考) 滋賀県立安土城考古博物館『おおもてみち』掲載の古代瓦にかかる「館蔵資料紹介」							
-	柿田遺跡	長浜市東上坂町	軒丸瓦	第28号	1999. 7	-	北村1999
-	九品寺遺跡 (安土廃寺)	蒲生郡安土町下豊浦	軒丸瓦	第33号	2000. 1	-	北村2000
-	大海道遺跡	伊香郡高月町保延寺	軒平瓦	第37号	2001. 1	-	北村2001
-	南滋賀町廃寺	大津市南志賀一丁目	軒平瓦	第45号	2003. 11	-	北村2003

あることが判明した。森小夜子さんがその人で、小学生の頃に同遺跡ではじめて瓦をひろって以来、長らく古代瓦に関心をもち続けて来られたという。後日、持参されたレポートによると、瓦採集地は図1下に示された犬上川左岸の山裾で、深さ幅とも1.5m程の谷川の崖面に瓦片が散見されたといい、軒丸瓦については昭和48～51年頃（1973～76）の大雨のあと、谷川底のほぼ中央でみつけたという。軒丸瓦は上流から流されてきた可能性も残るが、いずれにせよ立地状況から判断すると、檜崎東遺跡は瓦窯跡と見てよさそうである。

（4）本稿でとりあげる遺跡

さて今回、久々の「近江の古代寺院研究の基礎資料7」として伊香郡高月町高野丸山窯跡を取り上げたい。この遺跡は近江では数少ない白鳳期の瓦陶兼業窯跡であり、またハケ目を多用するという特徴的な瓦（以下、ハケ目瓦）を焼成する。こうしたことから、私は20年程前の学生時代からこの遺跡に強い興味をもっていたが、奇しくも本年度、再び滋賀

県文化財保護協会に勤務することとなって、まず最初にこの遺跡の調査にかかわることとなった。本稿では高野丸山窯跡とその採集品等を紹介し、近江におけるハケ目瓦について概観してみたい。

2. 遺跡の概要

高野丸山窯跡は琵琶湖北東部の高時川東岸の山裾に位置する。高時川の対岸には大海道遺跡から高月南遺跡に至る伊香郡内最大規模の古代遺跡群が形成され、とくに華寺遺跡・井口遺跡付近は伊香郡衙の最有力な所在候補地であって、古代寺院等の瓦葺建物も存在したとみられている。また高時川のやや上流側には己高山があって、奈良時代以降は近江における山岳仏教の一大拠点として繁栄した。高野集落内東端の高野神社は『延喜式』神明帳の高野神社に比定され、その境内は己高山満願寺跡とされる。境内にある高野大師堂がその法灯を伝えると言い、国指定重要文化財の木造伝教大師座像等を安置する。そして高野地先の北端に位置する天比比岐命神社も

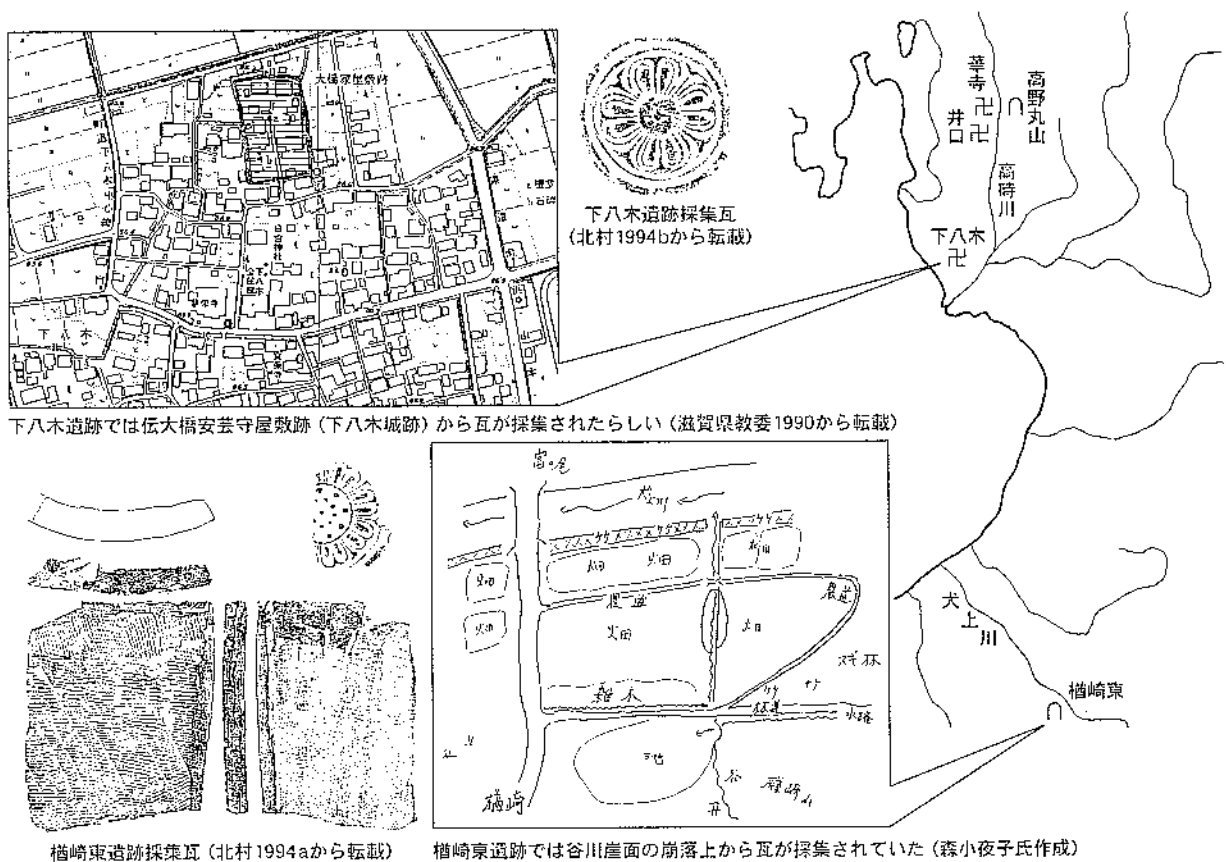


図1 高野丸山窯跡・下八木遺跡・檜崎東遺跡の位置等

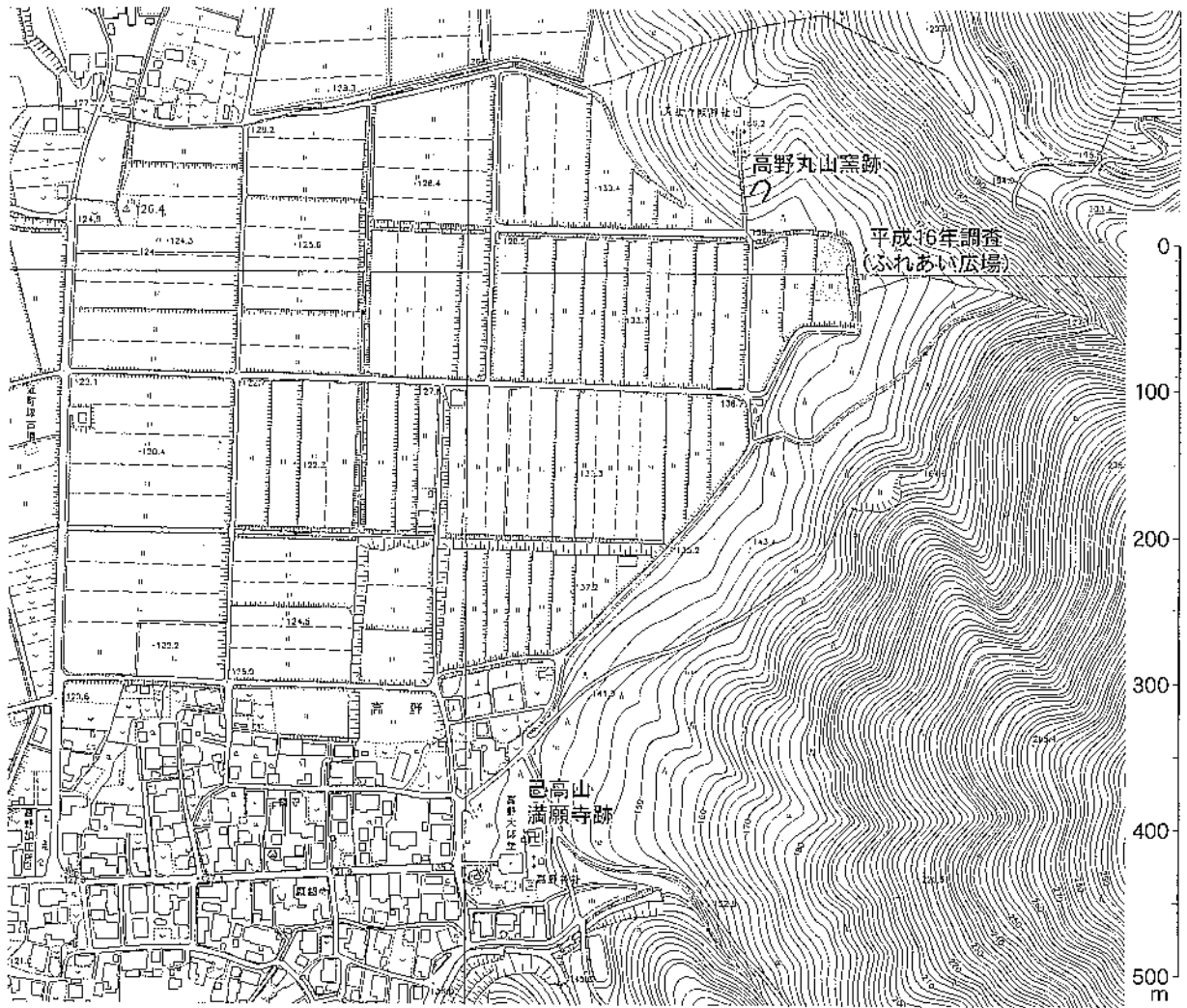


図2 高野丸山窯跡付近の詳細

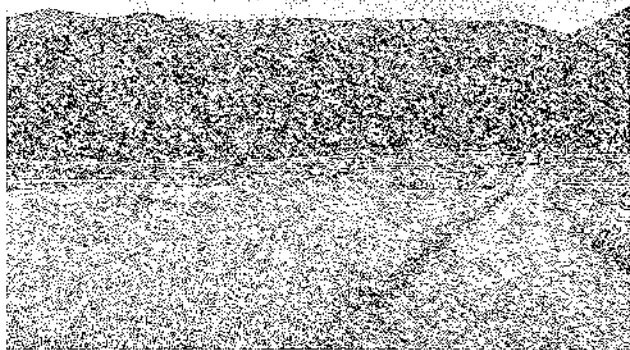


写真1 高野丸山遺跡の遠景（南西から）



写真2 高野丸山窯跡の灰原露出箇所

式内社に比定され、それと高野集落との間の水田一帯では、ふるくから屋瓦片の出土が知られるとともに、昭和49年（1974）のほ場整備事業の際には多量の屋瓦片等が出土したという。こうした経緯や歴史的環境から、昭和41年発行『滋賀県遺跡目録（第2輯）』（滋賀県教委1966）から昭和56年発行『昭和55年度滋賀県遺跡目録』（滋賀県教委1981）までについては、この付近は寺院跡として高野丸山遺跡と認識されていた。

ところが1980年代中頃になって天比比岐命神社の鳥居北東側の山裾で大木が倒壊し、その木根から須恵器片や瓦片とともにスサ入り粘土塊等が出土した。高月町教育委員会がこのことを契機として

付近の表面調査を実施したところ、それまで寺院跡と見られていた高野丸山遺跡の一角に、灰原端の露出する瓦陶兼業窯跡が存在することが明らかとなった（図2）。このことから昭和61年発行『昭和60年度滋賀県遺跡地図』以降（滋賀県教委1986a・1991・1996・2002）、高野丸山遺跡は窯跡として認識されている。高野丸山窯跡とは高野丸山遺跡の範囲内でみつかったこの窯跡の名称として使用する。

図3に示した須恵器と図5・6に示した屋瓦は高月町教育委員会の所蔵資料である。平成3年（1991）の表面調査時の採集品が最も多く、すべて高野丸山遺跡からの採集資料であることはまちがいない。ただしそれには窯跡以外からの採集資料も確実に含ま

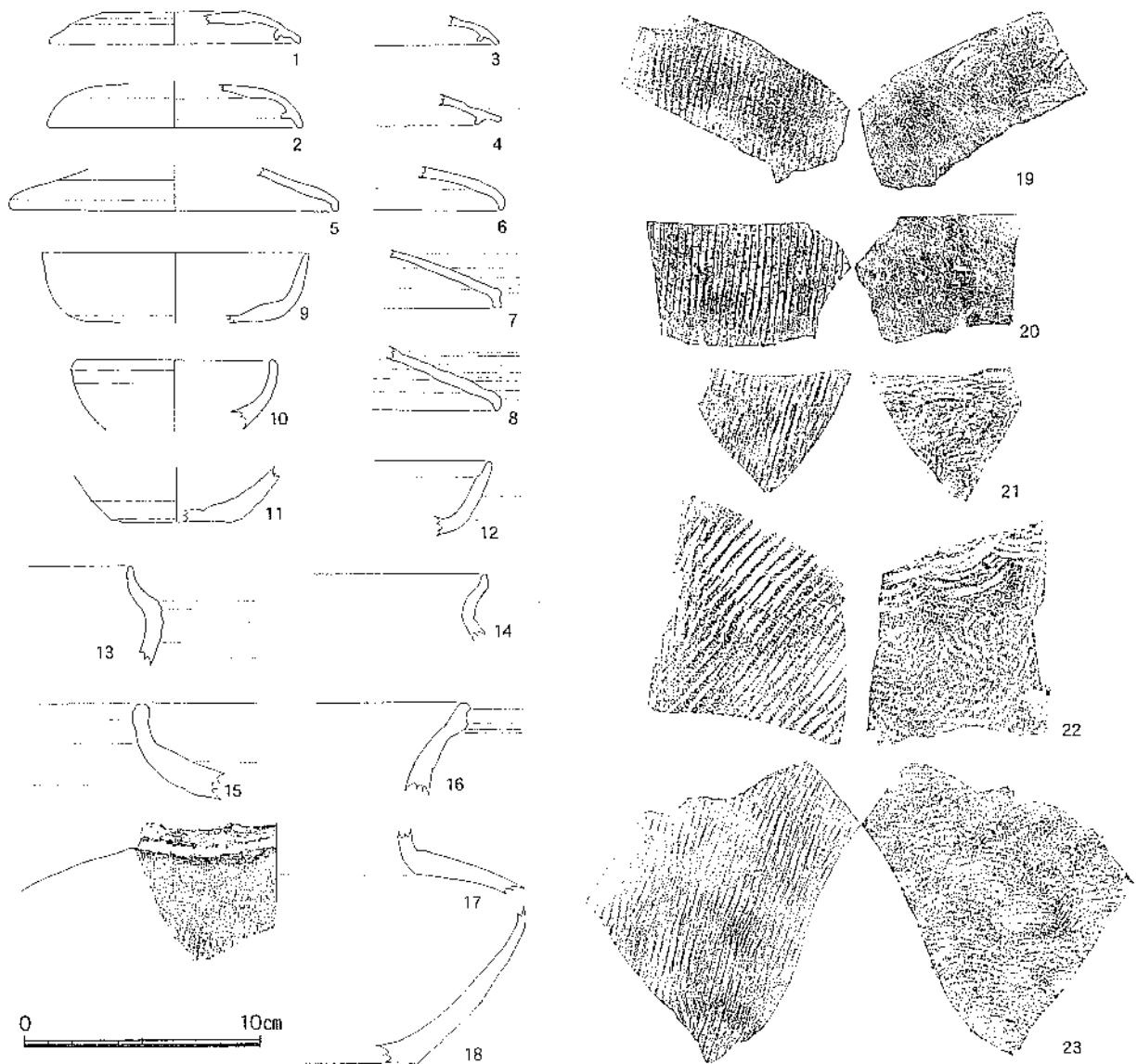


図3 高野丸山窯跡採集の須恵器

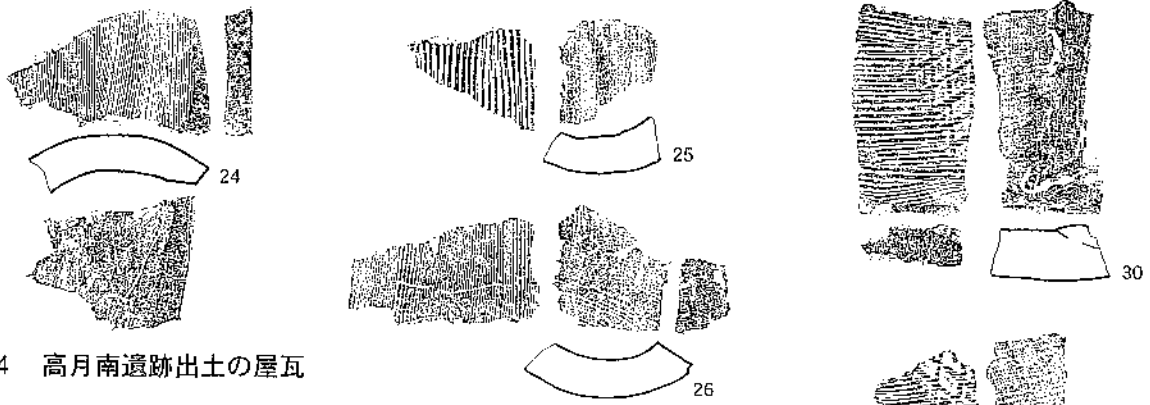


図4 高月南遺跡出土の屋瓦

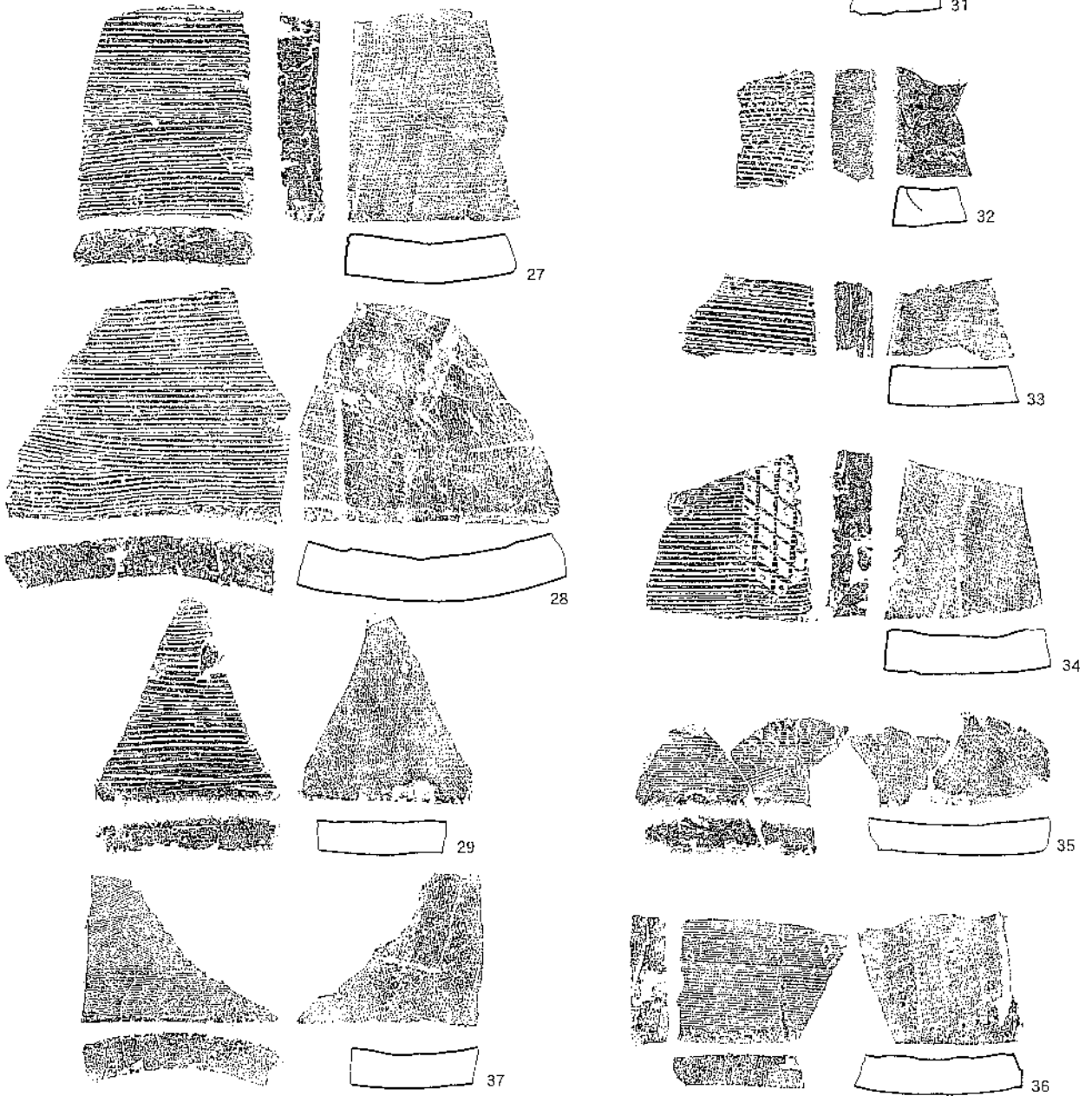
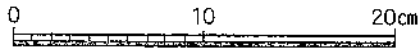


図5 高野丸山窯跡採集の屋瓦

れている。つまり軒丸瓦38、平瓦27・44は地元住民による採集資料であることが明確であり、型式としての点数が少ない平瓦39～43についてもその可能性がある。とくに平瓦27・44にはほ場整備に際して「峠ノ下」で採集したとの注記がある。小字「峠ノ下」は窯跡南東側の水田を指し、『平成13年度滋賀県遺跡地図』では確かにこの小字も高野丸山遺跡の範囲内に含まれている（滋賀県教委2002）。しかしこの2点の平瓦は窯跡採集資料でないことが明確である。そしてこのことをふまえると、さきの軒丸瓦や平瓦についても、いちおう窯跡採集資料からは除外しておくほうがよいだろうと判断される。

以上のような理由から、高野丸山窯跡からの確実な採集資料としては、まず高月町教育委員会が灰原から採集した須恵器1～23があげられる。そして丸瓦25・26および平瓦28～37については地元住民による採集資料が混入している可能性もあるが、型式としては高月町教育委員会が灰原から採集した瓦類の主体を占めるので、いちおうは窯跡での焼成品と見なしてよいだろう。ここではこれらについて高野丸山窯跡採集資料と認めることとし、その他については高野丸山遺跡採集の参考資料として取り扱うこととしたい。

なお高野丸山窯跡の南東側の水田において、滋賀県教育委員会が平成16年4月にふれあい広場整備工事に伴う試掘調査を実施した。本年度、私が再び滋賀県文化財保護協会に勤務して最初にたずさわることとなった調査とはこのことである。調査地はほ場整備事業に際して瓦片が出土した小字「峠ノ下」に含まれるが、調査の結果としては遺構・遺物とも特に認めることはできなかった。

3. 資料の紹介

(1) 採集資料

須恵器には坏類1～12と壺甕類13～23がある。坏蓋1・2は内面にかえりをもつ。口径10.5・10.7cmで、天井部外面には回転による横ハケ目（カキ目）が顕著に認められる。坏蓋5は口径13.7cmを測り、内面にかえりがない。高台のつく坏はいまのところ知られておらず、坏9は口径11.2cm、坏10は口径8.3cmを測る。甕胴部19・20の内面には細同心円が認

められる。

丸瓦には凸面に粗い縦ハケ目を施すAa類25と、細かい縦ハケ目を施すAb類26がある。凹面には布痕があり、粘土板を丸太状の内型に巻いて作っているらしい（以下、粘土板作り）。26の凸面の側縁には分割截線が認められる。

平瓦は粘土板桶巻き作り（以下、粘土板作り）である。凹面には布痕と桶枠板痕のほか、粘土板の合わせ目（30・32）、棒状分割凸帯（33・36）、布縋合わせ痕（28・34・37）が観察され、側面にも粘土円筒を分割した痕跡が認められる（33・36）。凸面には横ハケ目を施す。これは回転を利用した可能性がある。横ハケ目には3原体があるらしく、その粗いAa類28～34と、細かいAb類35・36、さらに細かいAc類37とに細分できる。小字「峠ノ下」採集の平瓦27もAa類に分類してよいだろう。Aa類の横ハケ目原体は丸瓦Aa類のハケ目のそれと同一の可能性もある。またAa類とAb類の一部には横ハケ目後に、それぞれ格子の大きさの異なる叩きを施している。Aa類30～34とAb類35・36がそれである。ただし格子叩きはまばらに施されるから、それが見えないAa類28・29についても偶然に叩きのない部分が破片化した可能性が高い。Ac類37も同様に理解してよいだろう。なお高野丸山窯跡採集資料はいずれも焼成が堅緻で、色調は濃い青灰色を呈するという特徴がある。

(2) 参考資料

軒丸瓦38は近江北部グループの湖東式軒丸瓦である。

平瓦は凸面の叩き締めを中心にB～D類に分類できる。B類39～41は凸面に細かな格子叩きを施す。粘土板作りで、凹面には布痕と桶枠板痕がある。C類42・43は凸面に細かな縄叩きを施したのち、それを擦り消す。凹面には布痕と桶枠板痕が認められ、側面には分割破面をそのまま残す。粘土板桶巻き作りである。D類44は凸面に粗い縄叩きを施す。一枚作りの可能性がある。

ここに取り上げた参考資料は焼成は堅緻ながら、酸化にせよ還元炎焼成にせよ、窯跡採集資料のように濃い色調を呈す個体はみあたらない。

(3) 年代と供給先

須恵器の年代観から、高野丸山窯跡の操業期間は7世紀後葉頃と見てよいだろう。

屋瓦の供給先については今のところ明確でないものの、高月南遺跡で1点のみ出土した丸瓦¹¹24は高野丸山窯跡の丸瓦Ab類と酷似している¹²⁾。小破片であるため十分に確認できないが、一本だけ太い条線が日立つハケ目であることから、おそらく両者のハケ目は同一原体になるだろう。

なお参考資料はいずれについても高時川対岸の井口遺跡に酷似品があり、華寺遺跡にも平瓦F類を除いて酷似品がある（滋賀県教委1984、北村・下田2005）。軒丸瓦38は両遺跡出土の2969Aと同范とみられ、平瓦D類は格子を彫刻した叩き板が井口遺跡・華寺遺跡ⅡA類のそれと同一原体と認められる。現状では、これらの屋瓦が高野丸山遺跡内の未知の窯跡から井口遺跡・華寺遺跡に供給された可能性もあると指摘するにとどめたい。

4. 近江のハケ目瓦

(1) 類例の概観

① 少ない類例

高野丸山窯跡採集瓦のきわだった技術的特徴は丸瓦A類の凸面にみられる縦ハケ目と、平瓦A類の凸面にみられる横ハケ目である。近江においてこうしたハケ目を多用する古代瓦（ハケ目瓦）は、鷗尾などを別にすれば表2の通りの出土例があるにすぎない。また遺跡数では約80の白鳳寺院関連遺跡のうち18遺跡で確認されるにとどまる。悉皆調査をおこなえば、さらにいくらかの遺跡でハケ目瓦が見つかることであろう。しかし既知のそれはほとんどの遺跡で数点から数十点程度しか認められないことが特徴で、かつ現状においても近江の古代瓦の内実はほぼ把握されていることを考慮すると、その遺跡数や点数が大幅に増加する見込みがないこともまた確実である。ハケ目瓦は近江の古代瓦のなかでは明らかに傍流的存在である。しかもそのほとんどすべてが丸瓦と平瓦であり、他にはごく少数の軒瓦が知られるにすぎない。

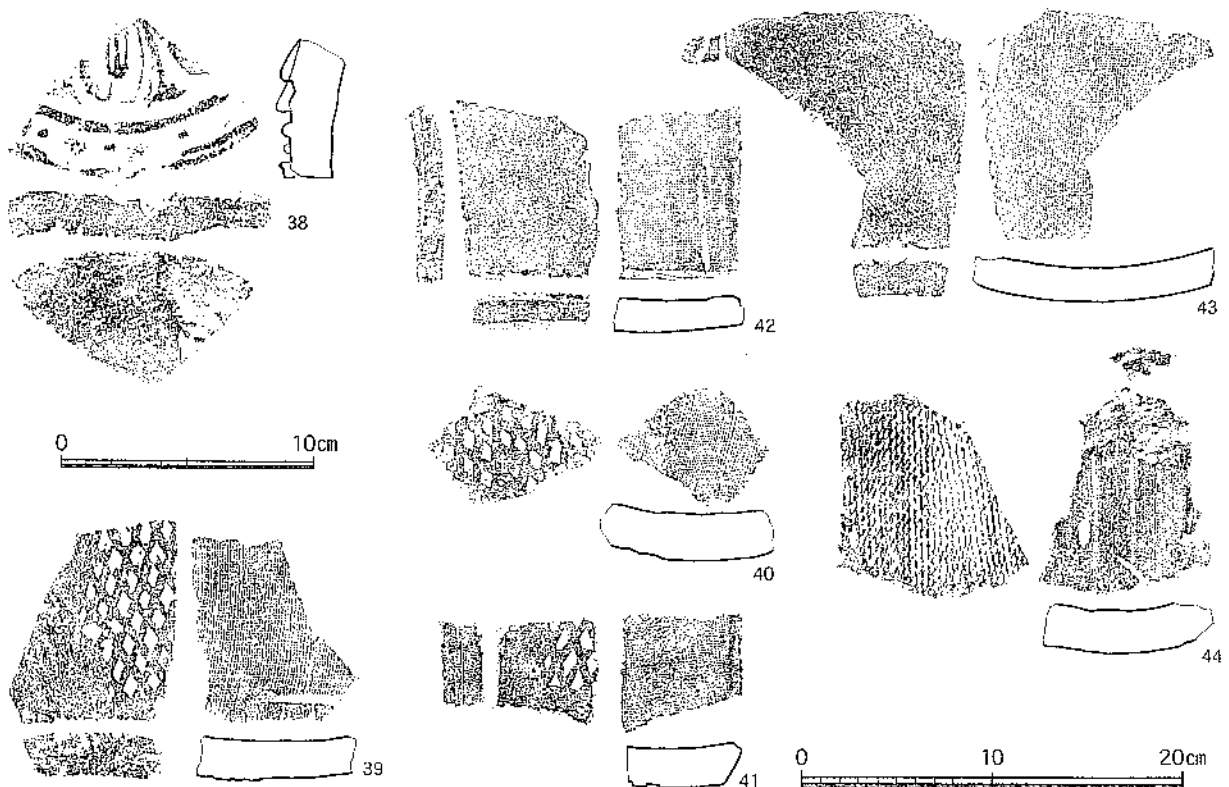


図6 高野丸山窯跡採集の屋瓦

表2 近江出土のハケ目瓦

遺跡名/所在地/文献	種類	調整部位等/ハケ目種別	瓦当紋様、凸面叩き等/一次形成	文献図版等
諸川瓦窯跡/伊香郡西浅井町菅浦/西浅井町教委1984				
	平瓦1b類	凹面/縦ハケ目	縄叩き後、縦ケズリ/粘土板作り	P26図11-1
華寺遺跡/伊香郡高月町保延寺/北村・下田2005				
	軒平瓦8191A	凸面/斜ハケ目	連続※状スタンプ紋/粘土紐作り	P41図4
	丸瓦I Ba類	凸面/斜ハケ目	/粘土板作り	P43図5
	丸瓦I Bb類	凸面/斜ハケ目	/粘土紐作り	
	平瓦I Ba類	凸面/斜ハケ目	/粘土板作り	
	平瓦I Bb類	凸面/斜ハケ目	/粘土紐作り	
井口遺跡/伊香郡高月町井口/滋賀県教委1984				
	平瓦	凸面/斜ハケ目	/粘土板作り	P240図153-9など
高野丸山窯跡/伊香郡高月町高野/本稿				
	丸瓦A類	凸面/縦ハケ目	/粘土板作り	図4-25
	丸瓦B類	凸面/縦ハケ目	/粘土板作り	図4-26
	平瓦A類	凸面/横ハケ目	格子まばら叩き/粘土板作り	図4-28~34
	平瓦B類	凸面/横ハケ目	格子まばら叩き/粘土板作り	図4-35・36
	平瓦C類	凸面/横ハケ目	格子まばら叩き/粘土板作り	図4-37
高月南遺跡/伊香郡高月町高月/本稿				
	丸瓦	凸面/縦ハケ目	/粘土板作り	図4-24
八島瓦窯跡/東浅井郡浅井町木尾/北村1995				
	平瓦I b1類	凹面/縦ハケ目	格子まばら叩き/粘土板作り	P3図3-5
新庄馬場廃寺/長浜市新庄馬場/滋賀県教委1986b				
	平瓦B類	凹面/縦ハケ目	格子まばら叩き/粘土板作り	P14図13-2・5・6
柿田遺跡/長浜市栗上坂町/長浜市教委2000				
	平瓦	凹面/縦ハケ目	格子密叩き/粘土板作り	P404図166-K294
三大寺廃寺/坂田郡米原町枝折/三辻・北村1988				
	丸瓦B類	凸面/縦ハケ目	/粘土板作り	P31図5
	平瓦Ba類	凸面/縦ハケ目	特殊まばら叩き/粘土板作り	P30図4
	平瓦Bb1類	凸面/縦ハケ目	特殊まばら叩き/粘土板作り	P30図4
法泉寺遺跡/坂田郡山東町本郷/山東町教委1986				
	丸瓦C類	凸面/縦ハケ目	/粘土板作り	図版5-13
	平瓦D類	凸面/縦ハケ目	特殊まばら叩き/粘土板作り	図版7-34・35
	平瓦D類	凸面/縦ハケ目	特殊まばら叩き/粘土板作り	図版7-37
普光寺廃寺/彦根市普光寺町/滋賀県教委1995b				
	軒丸瓦II B類	丸瓦部凸面等/縦ハケ目 瓦当裏面/周縁ハケ目	南滋賀廃寺系列川原寺式3169B/ 粘土板作り	P57図39-1207
	丸瓦III A類	凸面/横ハケ目	/粘土板作り	P69図48-1410
	丸瓦III B類	凸面/横ハケ目	/粘土板作り	P69図48-1411
	平瓦IV A類	凸面/横ハケ目	/粘土板作り	P65図46-1349~1350
	平瓦IV B類	凸面/横ハケ目	/粘土板作り	P65図46-1351
	平瓦IV C類	凸面/ 縦ハケ目、一部斜ハケ目	/粘土板作り	P65図46-1352
	平瓦IV D類	凸面/縦ハケ目	/粘土板作り	P65図46-1353
	平瓦IV E類	凸面/縦ハケ目	/粘土板作り	P65図46-1354
安土廃寺(獅子鼻B遺跡)/神埼郡能登川町/滋賀県教委1983				
	軒平瓦	平瓦部凸面/横ハケ目	簾状重弧紋/粘土板作り	実見
	平瓦	凸面/縦ハケ目	特殊まばら叩き/粘土板作り	P6図8(図版13-2)
	丸瓦	凸面/横ハケ目	/粘土板作り	実見
樋ノ口瓦窯跡/栗東市上砥山				
	軒平瓦	平瓦部凸面/横ハケ目	法隆寺式/粘土板作り	実見
雪野寺跡/蒲生郡竜王町川守/京都大学1992				
	軒平瓦C型式	瓦当面/斜ハケ目	素紋/粘土板作り	P29図17-11
観音堂廃寺/草津市下寺町/滋賀県教委1978				
	平瓦F類	凸面/縦ハケ目	/粘土板作り	P373図14
園城寺前身寺院跡/大津市園城寺町/近江古代寺院1989				
	軒丸瓦III B類	瓦当裏面/周縁ハケ目	南滋賀廃寺系列川原寺式3169B/ 粘土板作り	/図版60-4
衣川廃寺/大津市衣川2丁目/大津市教委2000				
	丸瓦B類	凸面/縦ハケ目	/粘土板作り	図版83-62・63
	平瓦D-2類	凹面/縦ハケ目	/粘土板作り	図版97-91・92
大供廃寺/高島郡今津町大供/今津町教委1983				
	平瓦8	凸面/縦ハケ目	/粘土板作り	図8-8、図9最上段左
	平瓦9	凸面/横ハケ目	/粘土板作り	図8-8、図9最上段右

②軒瓦

同紋同工の軒丸瓦が2遺跡で確認できる。普光寺廃寺ⅡB類と園城寺前身寺院跡ⅢB類とがそれで、半截丸瓦部を瓦当部に接合する際にハケ目が施されている。つまり普光寺廃寺のその粘土板作りの丸瓦部には縦ハケ目が、その側縁付近には横ハケ目が認められるほか、瓦当裏面にもハケ目が認められる。園城寺前身寺院跡例は丸瓦部を欠損するが、瓦当裏面の下半部には周縁に沿うハケ目が施されている。

軒平瓦には華寺遺跡の8191Aおよび安土廃寺の簾状重弧紋軒平瓦、樋ノ口瓦窯跡の法隆寺式軒平瓦が知られる。華寺遺跡例は直線顎式の粘土紐桶巻き作り（以下、粘土紐作り）で、凸面に斜ハケ目を施す。安土廃寺例は段顎式の粘土板作りで、平瓦部凸面に横ハケ目が施される。樋ノ口瓦窯跡例は曲線顎式の粘土板作りで、凸面に横ハケ目が施される。

③丸瓦

丸瓦は8遺跡から7型式が出土している。このうち高月南遺跡例と高野丸山窯跡B類、また三大寺廃寺B類と法泉寺遺跡C類とは同一型式であり、さらに普光寺廃寺ⅢA類と安土廃寺例とについてもハケ目や杵板連結内型痕などの特徴からは同一型式とみなされる。すべて無段式（行基葺式）で、叩き締め痕が観察できる例はない。華寺遺跡のⅠBb類のみが粘土紐作りで、他はすべて粘土板作りである。

ハケ目はすべて凸面に施され、凹面にハケ目を施す例は今のところ知られていない。ハケ目には縦ハケ目と横ハケ目、そして斜ハケ目がある。縦ハケ目は5遺跡で4型式が、横ハケ目は2遺跡で1型式が、斜ハケ目は1遺跡で2型式が知られる。いずれも粘土円筒の分割以前に施されたとみられ、三大寺廃寺B類には狭端から広端へという縦ハケ目の調整方向のわかるものがある。

④平瓦

平瓦は13遺跡での出土が知られる。八島瓦窯跡ⅠB1類と新庄馬場廃寺B類（三辻・北村1989）、三大寺廃寺Ba・Bb1類と法泉寺遺跡D類は同一型式であるから（北村1988）、都合21型式となる。このうち華寺遺跡のⅠBb類のみが粘土紐作りで、その他はすべて粘土板作りである。

凹面に施されるハケ目は5遺跡の4型式で知ら

れる。原則として縦ハケ目であり、そのなかには隅角や側縁・端縁に沿ったハケ目が観察できるものもあることから、凹面には粘土円筒の分割以後にハケ目を施したことがわかる。

凸面に施されるハケ目には縦ハケ目が6遺跡で8型式、横ハケ目が3遺跡で6型式、そして斜ハケ目は粘土紐作りの華寺遺跡ⅠBb類を含む2遺跡の3型式が知られる。これらに叩き締めが認められる場合は、原則としてハケ目の上からまばらに叩き締めるという特徴がある。加えてハケ目や叩き締めが側面によって切断されることから、ハケ目は粘土円筒の分割以前に施されたことがわかる。平瓦についてもハケ目は粘土円筒の状態のまま、凸面に施すことが主流であったと見てよいであろう。

（2）ハケ目と粘土紐作り

①ハケ目と土器作り

ハケ目は同時期の須恵器や土師器にきわめて普遍的に認められる。その役割は器壁の凹凸を平滑化し、また粘土を締め付けるとともに、器壁を薄く引き延ばし、それによって器形を変形させる効果をもつという（木立2003）。つまり土器類にハケ目が多用されることは、それが粘土紐を指で巻き上げて作ることに対応する技法と考えられる。一般的には、ハケ目と粘土紐作りは相互に密接な関係をもつと見てよいだろう。

②ハケ目と粘土紐作り

藤原宮では粘土紐作りの瓦にハケ目が多用される。このことから史上はじめて瓦葺きの宮を造営するにあたり、その大量の屋瓦を供給するため、瓦作りに未熟な土器工人を官瓦窯に動員・編成したとする見解がある（大脇1978）。つまりこの見解に立つと、瓦にみられるハケ目は粘土紐作りとともに土器作り由来の要素ということになる。

ところが近江ではハケ目瓦のほとんどすべてが粘土板作りである（表3）。粘土紐作りのハケ目瓦は、華寺遺跡の軒平瓦8191Aと平瓦ⅠBb類、丸瓦ⅠBb類が認められずに過ぎず、むしろ例外であると見てよい。ただしこれらの凸面には類例の少ない斜ハケ目が施される。このことは一見すると、斜ハケ目に限っては粘土紐作りに対応するようにも受け取れるが、藤原宮では斜ハケ目は注目されていない。また

表3 近江出土の粘土紐作り瓦（北村2004bから転載改変）

遺跡名／所在地／文献

分類	凸面調整／瓦当紋様等	文献図版等
華寺遺跡／伊香郡高月町保延寺／北村・下田2005		
軒平瓦7912A	ナデ／素紋	P38／図2
軒平瓦7874A	ナデ、ハケ目／指庄波状三重弧紋	P40／図3
軒平瓦8191A	斜ハケ目／連続※状スタンプ紋	P40／図4
軒平瓦8191B	ナデ／連続※状スタンプ紋	
平瓦IAb類	ナデ、縄目叩きナデ消し／	
平瓦IBb類	斜ハケ目／	
丸瓦IAb類	ナデ／	
丸瓦IBb類	斜ハケ目／	
丸瓦ICb類	縦削り／	
井口遺跡／伊香郡高月町井口／滋賀県教委1984		
軒丸瓦2969A(一部)	湖東式	実見
軒平瓦8191c	ナデ／連続※状スタンプ紋	P251図164-22
平瓦	縄目叩きナデ消し／	P239図152-6・10
平瓦	ナデ／	P240図153-2など
松尾寺遺跡／伊香郡高月町松尾／近江寺院1989		
平瓦	縄叩き／	図版226-2
法道寺遺跡／東浅井郡湖北町津里		
平瓦	縄叩き／	実見
浅井寺遺跡／東浅井郡湖北町今西		
丸瓦	縄目ナデ消し／	実見
新庄馬場廃寺／長浜市新庄馬場／滋賀県教委1986b		
平瓦C類	縄叩きナデ消し後格子叩き／	P18図17(図版11-17)
八坂京遺跡／彦根市八坂町／滋賀県教委1995a		
平瓦ナデO類	回転ナデ／	P47図25-224
丸瓦	(磨滅)／	P51図27-247
長寺遺跡／犬上郡甲良町長寺／滋賀県教委1989		
丸瓦	縄叩きナデ消し／	P15図11-24
法堂寺廃寺／能登川町佐野／能登川町教委1999		
丸瓦M3	ナデ／	P110図80・2・3(図版50M3)
雷野寺跡／蒲生郡竜王町川守／京都大学1992		
軒平瓦A類	四重弧紋	P29図17-3
北村廃寺／野洲郡野洲町北／滋賀県教委1985		
丸瓦I類	／	P13に記述
森瓦窯跡／大津市石居二丁目／重岡1998		
丸瓦7	平行叩きヘラナデ／桝板連結内型	P127表3に記述

華寺遺跡においても井口遺跡においても斜ハケ目を施す粘土板作り瓦とともに、それを施さない粘土紐作り瓦も認められる（北村・下田2005）。そして高野丸山窯跡については、顕著なハケ目を施す須恵器坏蓋と、ハケ目を多用する瓦とがある。このことは瓦作りに土器工人の関与を示す如くだが、ここでも粘土紐作り瓦は出上していない。近江においては、ハケ目と粘土紐作りとのあいだに特に有効な連鎖関係は認めにくい。

③ハケ目の役割

ハケ目が粘土紐作りと特に密接な関係にないとなれば、その目的はおそらく凸面を中心とした器壁の凹凸を平滑化することにあつたとみてよいだろう。そしてハケ目瓦に認められるもうひとつの特徴として、凸面の叩き締めを弱めることができる。

つまり叩き締めがハケ目によって消去されている可能性はあるものの、実際にそれが確認される例はない。またそれが認められる場合であっても、まずハケ目を施した後、そのうえからまばらにしか叩き締めない。このことから判断すると、粘土板作りの屋瓦にハケ目が施される理由は、器壁を平滑化することに加えて、叩き締めを替えて粘土を締める効果が期待されたと理解できるかもしれない。

なお平瓦の凹面にみえるハケ目については、粘土円筒の分割後に施される。このとき平瓦は半乾燥の生瓦状態にあり、この段階で布目を消去するまでにハケ目を施すということは、表面となる凹面を平滑化して防水性を高める効果を期待したとも考えられる。

(3) ハケ目瓦の年代

近江のハケ目瓦のうち、高野丸山窯跡例は瓦陶兼業窯であるから、その年代が最も明確である。すなわち屋瓦とともに採集された須恵器から、それは7世紀後葉頃に位置づけられる。

普光寺廃寺の軒丸瓦ⅡB類と園城寺前身寺院跡の軒丸瓦ⅢB類については、南滋賀廃寺系列の川原寺式軒丸瓦の最新段階に位置づけられる(3169B、北村2004a)。また華寺遺跡の軒平瓦8191Aは湖東式軒瓦のうち、近江北部に二次的に展開した軒丸瓦グループに伴う(2961A・2969A/北村・下田2005)。さらに安土廃寺の籐状重弧紋軒平瓦は、重弧紋を施紋後に挽型を押し付けて籐状にするタイプで、おそらく面鋸歯紋縁のさらに外側に素紋の平縁がつく川原寺式の系譜下にある軒丸瓦(近江寺院1989/P450の5・6、図版160の8・9)に伴うとみてよいだろう。そして樋ノ口瓦窯跡例はやや退化した法隆寺式軒平瓦である。

凸面にハケ目を施す丸瓦・平瓦のうち、三大寺廃寺の丸瓦B類と平瓦Ba・Bb1類は、それぞれ法泉寺遺跡の丸瓦C類と平瓦D類と同一型式で、安土廃寺にもそれと酷似しつつも叩き板原体の異なる平瓦が認められる。三大寺廃寺と法泉寺遺跡では本薬師寺式軒瓦6276A? - 6641Hが出土しており(米原町教委1988/P19図16、山東町教委1986/P13図6の1~9)、安土廃寺では藤原宮6278Aに類似する軒丸瓦が採集されている⁽³⁾(近江寺院1989/P450の3、図版160の2・3)。

また凹面にハケ目を施す平瓦のうち、八島瓦窯跡I b1類と新庄馬場廃寺B類は竹ヶ鼻廃寺系列の山田寺式軒丸瓦の最新段階に伴うとみられる(北村2000・2001)。

上述のように、ハケ目のある軒瓦や、ハケ目瓦が伴うとみられる軒瓦から判断すると、その年代は高野丸山窯跡例とほぼ同時期の7世紀後葉頃から8世紀前葉頃に位置づけてよいだろう。その他のハケ目瓦

についても丸瓦は無段式(行基葺式)、平瓦は桶巻き作りであるから、この年代推定とは特に矛盾しないことがわかる。

(4) ハケ目瓦の出現背景

7世紀後葉頃から8世紀前葉頃にかけての時期は、中央寺院所用瓦の瓦当紋様が全国各地で地域的な展開を遂げる。上述の竹ヶ鼻廃寺系列の山田寺式軒瓦、南滋賀廃寺系列の川原寺式軒丸瓦も、近江におけるそうした事例であるといつてよい。瓦当紋様の地域的展開は作瓦技法の在地化に裏付けられた現象であり、藤原宮所用瓦の一部に近江産瓦(Gグループ)が認められることも(山崎1983)、地域に根付いたこうした瓦生産の存在を前提としている。瓦にハケ目を多用することは、この時期に進展した作瓦技法の在地化のなかで出現した傍流的な一手法であったとみられる。

5. まとめ

近江においては、平瓦の凹面布目の消去に少数のハケ目使用例が認められるものの、その多くは凸面調整に用いられる。そして丸瓦や軒丸瓦では主として縦ハケ目が、平瓦や軒平瓦では主として横ハケ目(カキ目)が多く用いられる傾向がある。ただしこのうちの三大寺廃寺例および法泉寺遺跡例と、安土廃寺例の平瓦を除けば、それぞれを相互に系譜付けることは難しい。瓦にハケ目を多用することは、原則として7世紀後葉頃から8世紀前葉頃にかけて進展した作瓦技法の在地化のなかで出現した傍流的な一手法であったとみなしてよいだろう。

謝辞

本稿をまとめるにあたっては、高月町教育委員会黒坂秀樹氏より格別のご配慮を賜りました。とくに記して感謝いたします。

(きたむら よしひろ：企画調査課 主任)

註

- (1) 『近江の古代寺院』P610図3では、これを高野丸山窯跡出土平瓦としているが、誤りである。
- (2) このことは黒坂秀樹氏がはやくに指摘している(黒坂1987)。

- (3) 藤原宮6278A同範とみる見解もあるが(花谷1993)、安土廃寺例は外区斜縁が×状の凸線鋸歯紋とみられ、瓦当部と丸瓦部の接合も嵌め込み式になる可能性が高い。再検討が必要であろう。

引用・参考文献

- 大脇 潔「V2A屋瓦と製作地」『飛鳥・藤原宮 発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所1978
- 木立雅朗「刷毛目」調整と工具の基礎研究1」『立命館大学考古学論集Ⅲ』同刊行会2003
- 北村圭弘「正恩寺遺跡出土の瓦について」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XV』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会1988
- 北村圭弘「近江の山田寺式軒瓦」『シンポジウム飛鳥白鳳の瓦づくりⅣ』古代瓦研究会2000
- 北村圭弘「近江の山田寺式軒丸瓦と犬上氏」『近江の歴史と考古』西田弘先生米寿記念論集刊行会2001
- 北村圭弘「南滋賀鹿寺系列の川原寺式軒丸瓦」『紀要第12号』滋賀県立安土城考古博物館2004a
- 北村圭弘「近江の粘土紐作り瓦と藤原宮の作瓦」『金大考古第46号』金沢大学考古学講座2004b
- 北村圭弘・下田真里子「華寺遺跡の屋瓦」『北近江第2号』北近江古代史研究会2005
- 黒坂秀樹「高月南遺跡発掘調査概要」『息長氏論叢第3輯』息長氏研究会1987
- 重岡 卓「森瓦窯再考」『紀要第11号』財滋賀県文化財保護協会1998
- 中沢南水『新説浅井三代記』東浅井郡教育会 1955
- 花谷 浩「寺の瓦作りと宮の瓦作り」『考古学研究第40巻第2号』考古学研究会1993
- 三辻利一・北村圭弘「三大寺鹿寺出土瓦の胎土分析」『米原町埋蔵文化財発掘調査報告書Z』米原町教育委員会1988
- 山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所1983
- 近江の古代寺院刊行会『近江の古代寺院』1989
- 京都大学考古学研究室『塑像出土古代寺院の総合的研究』1992
- 『滋賀県遺跡目録』滋賀県教育委員会1966
- 『滋賀県文化財調査年報（昭和五十一年度）』滋賀県教育委員会1978
- 『昭和55年度滋賀県遺跡目録』滋賀県教育委員会1981
- 『獅子鼻B遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会1983
- 『国道365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会1984
- 『県道大津能登川長浜線交通安全施設工事関連埋蔵文化財調査報告書ⅡⅡ』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会1985
- 『昭和60年度滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会1986a
- 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XIII 4』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1986b
- 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XVII 3』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1989
- 『滋賀県中世城郭分布調査7』滋賀県教育委員会1990
- 『平成2年度滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会1991
- 『（仮称）滋賀県立大学整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会1995a
- 『土地改良総合整備関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ2』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会1995b
- 『平成7年度滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会1996
- 『平成13年度滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会2002
- 『大津市埋蔵文化財調査報告書30』大津市教育委員会2000
- 『長浜市埋蔵文化財発掘調査資料第25集2』長浜市教育委員会2000
- 『今津町文化財調査報告書第2集』今津町教育委員会1983
- 『山東町埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』山東町教育委員会1986
- 『諸川遺跡発掘調査報告書』西浅井町教育委員会・財滋賀県文化財保護協会1984
- 『能登川町埋蔵文化財調査報告書第47-2集』能登川町教育委員会1999
- 『米原町埋蔵文化財発掘調査報告書VI』米原町教育委員会1988

編集後記

紀要第18号をお届けします。今号は7本の原稿を掲載することができました。内容は縄文時代から現代におよび、中でも昭和初期の埋蔵文化財をめぐる状況の一端を明らかにした論考は、古い時代を対象にしている考古学も、現代史から自由ではないということを、改めて考えさせてくれるものです。

この紀要を職員の研究活動の成果として、今後もさらに研鑽を積んでいきたいと考えておりますので、みなさまからの積極的なご叱正・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(M.K.)

平成17年(2005年)3月

紀 要 第18号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL (077)548-9780
FAX (077)543-1525
URL: <http://www.shiga-bunkazai.jp>
E-mail: mail@shiga-bunkazai.jp
印刷・製本 富士出版印刷株式会社